

正宗白鳥

旧友追憶記



# 旧友追憶記



## 一

三十年も前の事であるが、或る会合の席で、岩野泡鳴が、元氣のいい声で、「我々のうちでは、田山君が最後まで生き残って、我々の後仕末をしてくれるのだよ」といったことがあった。座中一同それには同感であった。誰れの目にも、花袋は頑健で、誰よりも長く生きのびる人のように見られていた。泡鳴も花袋に劣らぬほど頑健

で、ぶつても叩いても倒れそうでなかった。ところが、人の命は分らぬもので、頑健であつた彼らの方が、虚弱だつた秋声秋江などよりも早く逝去した。そして、あの頃の仲間のうちでは最も微弱で、夏の日力にも、冬の風にも耐えられないように、傍人に思われていた私が、最後の一人として生き残るような廻り合せになつたのは、いかにも不思議な事なので、あの頃の誰れにだつて予想されなかつた事である。

近年、秋声から秋江と続けざまに、最も親しかつた知友を失つた私は、最近、上司小剣の死に接して、いよいよ

よ私は一人ぼっちになったという感じが濃厚になった。秋声、秋江、小剣及び私との四人は、一群を成しているように、文壇人に思われていたが、実際、長年月に渡って私が親しく交っていたのは、彼ら三人であつたといつてもいいようだ。そして、私は最後に生き残つたため彼ら三人の葬儀に列しなければならぬ破目になつた。秋声告別式の時には、柄になく会葬者に聞かせるための弔辞を読んだりした。泡鳴が花袋に期待したような死者の跡仕末を、秋江、小剣二氏については、私が多少取り計らうような奇異な現象を呈した。そうして私自身は、死ぬ

時に旧友の誰れの世話にもなれないことになったのだ。

心細い訳だが、一面サツパリしてよさそうでもある。

それを思いこれ进行につけ、この機会に旧知友に対しての一篇の追憶記を書いて置きたくなつた。総括的弔辞を述べんとするのだ。

上司小剣とは読売新聞記者として知り合いとなつて、私の在職七年間同僚として毎日会つていた訳だ。彼は私より早く入社して、私の退社後も数年間記者生活を続けていたようであつた。『U新聞年代記』と題した作品には実名を用いて新聞編輯局の光景を描写して、



私の行動もその中に取り入れられている。新聞記者時代が私の青春時代であったのだが、その頃の私を傍観者としてよく知っていたのは小剣であったと、私は思っている。しかし、彼は私の事を、小説や随筆において思う存分に書いてはいない。それは私に取って好都合であったが、一面からいうと、物足らぬ思いがしないでもない。私の入社した頃、小剣は年二度の大相撲記事を扱っていた。当時の「文化欄」であった一面の編輯をしていた。それから、「その日その日」という題で、毎日二、三行の警句らしいもの、ユーモラスなものなどを書いていった。

独得の才能がここに現れていたものであった。私は独身の  
下宿住いで、甚だ気楽であったが、小剣は生活には細心  
の注意を払っていたらしかった。角力すもう記者なんかやって  
いては前途が不安であると思っていたらしく、この方の  
掛りは止めにしたようであった。そして、小さな雑誌の  
発刊を企てて二、三号は出版したこともあった。どうい  
う手蔓てづるで、どういう人の援助があったのか知らなかった  
が、私も頼まれて毎号寄稿する約を結んだ。ヴィジエテ  
リーのゾラ伝を丸善から買って来て読んでいたところだ  
ったので、それを種本としてゾラの事を書いたことを記

憶している。その雑誌は売れ行きが面白くないので彼は早く見切りをつけて止めることにしたのだが、それを機縁に小説を書いて、生活の資をそれから獲<sup>え</sup>ようと心掛けるようになったらしかかった。全体、小剣と私とは数十年の交際を続けたに關らず、自分の心の中を打ち開けて話し合うことは無かった。毎日社内で顔を合せながら、世間話はつねにしていながら、自作の小説について、打ち開け話をすることも意見の交換をすることもなかった。私が小説をあちらこちらの雑誌に発表しだして、社内の誰彼に読まれて噂されていた頃だったので、小剣もひそ

かにそれに刺戟されていたのではなかったかと、私はあとで勘づいている。

「あれに書けるのならおれにも書けるだろう」と発憤したのではあるまいか。

『木像』という長篇が新聞に連載されたが、私はこれは読んでいない。面白いものだといっていた人もあったが、文壇で価値を認められるには至らなかつた。作家として小剣の名が知られだしたのは、『ホト、ギス』に掲載された『鱧はもの皮』以後の事である。彼が腸チフスを患って重態に陥ったのが、運よく回復した時、同時に『鱧

の皮』が文壇で賞讃されたのであった。小剣は一生のうち、最も幸福感を味ったのはこの時分であつたのだらう。私は、最近、或る娯楽雑誌に転載されている『鱧の皮』を偶然読んで、昔を思い出したのであるが、これは無類の作品である。道頓堀界限、法善寺裏あたり、大阪の盛り場の光景を描いて妙を極めていると云つていい。中年にして文壇に出た小剣の出世作である。あの頃、近松秋江が激賞して、「机の上で考えたような小説とはちがつて、本当の事がよく書けている」と云つていた。私は今度新たに読んで、昔読んだ時よりも一層その妙味を感じ

ている。彼は、新聞記者時代に、社会主義についてよく語っていたが、その時は、不断とちがって過激な言葉を洩らしていた。階級闘争には熱意をもっていたらしく、戦争は嫌いだが、階級戦争には自分も加ってもいいというような事まで公言していた。それにかかわらず、あの頃の彼の小説には、そういう思想を現そうとした所は無かったようだ。『鱧の皮』をはじめ、『父の婚礼』『兵隊の宿』など、あの頃の作品が彼の一生の作品のうち、作者独得の色彩を放った傑作であるのだ。大阪の市井、奈良あたりの地方色を表現したものは、どれも面白く、末

長く愛翫されるだろうと察せられる。

彼は元から平和主義者であり、軍人ぎらいであった。そして、スイスやベルギーがさしたる軍備を有していないでも独立を保っているのは、左右の強国がお互いに牽制し合っているためなので、小国でもああいう国は気楽でいいと、しばしばそれらの国を羨ましい国として推讃していた。私は第一次世界戦争の時、ベルギーがあんなひどい目に会わされたのを知るにつれて、先ず小剣君の所説を思い出した。世の中の事はそううまく注文通りに行くものじゃないと痛感した。

私は新社長によって免職させられたのだが、その時小剣は私を雑司ヶ谷の小屋に訪ねて来て、一ふりの日本刀を呉れた。賤別のしるしであろう。軍人嫌いの平和主義者が刀剣を贈るのは似合しからぬ事であるが、その時分私がそういう兇器を欲しがっていたのを察したためであろうか。私はろくに見もしないで押入にしまっていた。棄てもせず、用いることもなく、ガラクタと一しよに保存していたがついに戦災で焼失したのである。



小剣が『鱧の皮』を発表した時と、大体同じ時代に、泡鳴は『毒薬を飲む女』を中央公論に発表したのであった。人柄が異っている如く、作風も異っていた。泡鳴のこの小説は最近新たに出版されたもので、私は珍しい思いをして読み直したが、ひどく粗野なもので、読後感はいきいきしたものではない。いきいきした或る種の人生がそこに活躍していることは、明らかに分っているが、醜悪が醜悪そのままに出ているのがいやになるのである。私はこの作中の二人の女性の現実の正体を知っているの

で、それらが眼前に浮んで来て、作品の純粹の鑑賞が妨げられるのである。モデルを知っていることは作品鑑賞に便利であるとともに、正しい鑑賞の害になることもあるのだ。泡鳴、秋江の作品については殊にその感じがある。

泡鳴、秋江二人の作品は、明治・大正時代の文学のうちでも特殊のもので、生前よりも死後において、真価が認められるのではないかと、私はかねて思っていた。最近『黒髪』など、秋江の傑作が新たに出版され、泡鳴の有名な長篇五部作なども近いうちに出版されるそうだ

が、今日の小説愛好者、青年作家、青年批評家がいかにこれらの作品を受け入れるかと、興味をもって注意している。秋江、泡鳴、花袋などは皆女性につき、愛慾につき、自己の体験を、隠すところなく思う存分に叙述し描写したのだから、作家として遺憾のない訳で、他人が読んで何と感じようと、当人に取ってはどうでもいいはずである。「僕らは作品が永久にわたり生命があってもなくっても、そんなことには頓着しない。その日その場その刹那において、人生全体の幻影が特殊の描写に現れなければならぬ」と、泡鳴は自分の創作態度をいって

る。秋江は秋江で、「人間の愚かな煩惱については、私は相当に深い経験を持っているつもりである」といい、「それだけの五慾煩惱迷妄の煉獄を経てきて、はじめて人間の事が透明に見えてくるのではないか」といつている。しかし、二人とも自分の志していた境地に達したのである。先日、出版関係の或る知人に会って話をしているうちに秋江の小説の話が出て、「あの小説は、あんな風だと女に嫌われるのが当り前だという事をよく書いてあるだけだ」と、その人はいつていた。これも一面当を得た観方である。「泡鳴のは独りよがりで、自分勝

手である。「田山さんには、こまやかな愛情があつて、読んで気持がいい」というような批評も出た。

秋江は、はじめのうちは、話は面白いし、打ち解け易いし、女性にも好かれるのであつたが、次第に、しつこくてうるさい本性を出して来るので、いやがられるのであつた。私は、『黒髪』から『狂乱』『霜凍る宵』を通じて、今度三度目に読んだのだが、終末の『続霜凍る宵』まで読みつづけるとうんざりした。女性に關係して惑溺した心境は、秋江独得の味いを持っている訳だが、終末のあたりになると、秋江式しつこさ、うるささのマンネ

リズムが鼻につくのだ。私も老人の心境に次第に陥りだしたので、あくどい作品に心を惹かれなくなつたのか。

泡鳴が世間の思惑を顧慮しないで傍若無人に振舞うのを、坪内逍遥先生は感心され、むしろ羨ましく思われているという噂を耳にした私は、早速それを泡鳴に伝えると、彼は大いに喜んで得意になつたらしかつた。それで、その事を頻りに口にして宣伝した。或る時も私を証人にして、「逍遥は僕を認めている」と知友にほこつたこともあつた。そういう点では、彼は無邪気であり、率直であつた。長い間生活の苦勞はし続けていたのに関らず、

陰険なところも狡猾なところも無かった。「君はえらいよ」と人にいわれると、そのままに受け入れて、「おれはえらいのだ」と思っていたようだ。自分で自分をえらいと思ひ、また自分のえらさを人に認めさせたいと熱心に望んでいたことにおいて、泡鳴の如きは、あの頃の知人のうちでは稀であつた。うぬ惚れは誰れにでもあるものだが、しかし、うぬ惚れ通していられるものではない。懷疑に襲われ、自己嫌悪に悩むこともあるものだが、泡鳴にはそれが無かつた。

泡鳴の五部作は、徹底的「私小説」であり、自己の行

動と思想をすべて暴露してあます所なしといったような作品であるが、彼もはじめは空想を弄した新体詩を作ったりしていたのだ。『耽溺』をはじめとして、次第に自己の言行心境を有りのままに描写するようになったのは、田山花袋の影響であつた。「そうだろう」と、或る時私が念を押すと、「そうだ」と、泡鳴は素直に答えた。独創家を以て任じていた彼も、小説や詩に、自分の事を有りのままに剥きだしに書き徹せばいいと、思いつくには至らなかつた。凡庸な、馬鹿正直な花袋にしてはじめて決行し得たのである。『蒲団』が出なかつたら、秋江



も泡鳴も女性関係の徹底的暴露小説を発表する気持にはならなかったであろう。「あろう」ではない。「ならなかつた」のだ。秋江は紅葉の『金色夜叉』を愛好し、紅葉の『にぎりえ』や『十三夜』を、終始一貫して讚美していて、小説とはそういうものであると思っていれば、かつたが、自分で書く場合には、田山花袋の態度に追随したのだ。泡鳴でも秋江でも、自分以外のものを主題とした作品は、ひどく出来栄えが落ちるのである。創作の天分が豊かであつたとはいえない。しかし、作家として天分の豊かであると思われる漱石や潤一郎の、芸術的

に凝った作品と並べて見て、彼らの自己暴露小説にも棄て難い妙味のあるのを我々は覚えるのである。

何主義でもそうであるが、あの頃の自然主義信奉者にしても、多くはただの雷同者であったり、不徹底であり微温的であったりしたが、そのうちで、泡鳴は徹底していて熱烈であり、自然主義万能であつたのだ。元祖の花袋よりも徹底していた。自然主義でない鷗外や逍遙や漱石は二流文士であると断言していたのだ。シェークスピアはボンクラでありゲーテも浅薄だと頭から罵倒していた。自然主義の作風にしても、花袋所説の平面描写をき

らい、客観説を排斥して主観の燃焼を説いていた。彼の妥協しない信念は、今日から回顧して壮烈であつたように思われる。「宇宙はただ優強者が弱劣者を吸収して行くその足跡を印した名残りだ」といい、「仏教でもニーチェでも、真理を外的に追っていた。しかし、真理は自己以外に無い。自己の誠実な努力と経験との外に求めようは無いら」という彼の主張は、これを文学に移すと、私小説一本鎗となり、一元描写という作風の必要も起つて来るのだ。

## 三

殆んど四十年も前のことである。私は若い盛りであつたのにかかわらず、身体は弱かつた。胃腸の働きは衰えていたし、神経衰弱の不眠症に悩まされていた。痩せて青い顔していて、傍人の目に病人らしく映っていたらしかつた。花袋の最初の長篇『生』が、読売新聞に連載されていた頃であつたが、ある日、彼は社へ立ち寄つて、主筆や私に会つて世間話をしていゝうちに、「君は海辺へでも行つて休養して来たらどうだね。身体が弱つてゐる

ようじゃないか」と私の身を案じているようにいって、主筆にも頼んだ。私が『地獄』という短篇を書いた時にも、それを読んだ花袋は、私の頭が狂いかけてでもいるかと気遣ったらしく、「乞う自愛せよ」と、私を憐むような口調でいったことがあった。

花袋の『生』の出ている時分に、茅ヶ崎の病院における独歩の病状記が、同じ読売新聞にしばしば掲げられていた。彼の病気は次第に重くなっていたようであった。それで、或る日、原稿持参で社に立ち寄った泡鳴が、「これから独歩を見舞いに行こうじゃないか」と、私を誘っ

た。生前の独歩に最後の面会をしようと思っていたのだ。私は身体が弱っている時ではあり、茅ヶ崎まで行くのは大儀であるし、死んで行く人に会いたいとも思っていないなかったので、一応は断ったが、折角思い立った泡鳴も、一人では心進まぬらしかかったので、「じゃ、一しよに行つてやろう」と、私は恩に着せて同行することにした。彼はびんづめ壇詰のマシマロを土産に買った。私は社で使っていた乗車券を借りたので二等に乗ることになつて、彼もおつき合いに二等切符を買った。あの頃の例として二等室はガラ空きであつた。私は横になつて沈黙を

守っていた。茅ヶ崎の病院へ行くと、田山、小栗、吉江、前田、その他何人かが見舞いに来ていた。見舞い人同士の間で暗闘があったらしく、病院のほとりの宿に一しよに泊るのを快しとしない傾向があつて、私や泡鳴は、田山、吉江、前田の三氏に随つて、国府津こうつづまで行つて泊つた。私は頭の加減が悪くて憂鬱であつたが、他の人々も朗らかでなかつた。泡鳴一人が空はしやぎにはしやいで、芸者を呼んだりした。翌日再び病院を見舞つて、心の中で独歩に別れを告げて、泡鳴と二人だけ、空いた二等車に乗つて帰京した。旅行というほどの事ではないが、泡

鳴と一しよに汽車旅行をしたのは、この一回だけであつた。これら何人かの文壇人は、私の長い生涯の間の交友であつたとはいえ、その交友振りは甚だ淡泊であつたのであろう。世間多くの人々は、親しい友人とどういう風に交るのであろうか。私は秋江とも秋声とも一しよに旅行したことは一度もなかつた。ただ小剣とは一度京都へ行ったことがあつた。私が帰郷のついでであつた。四月になつたばかりで、夜の京都はまだ寒かつた。私が一、二度泊つたことのある祇園の近くの月のやという宿屋に泊つて、都踊りを観て、翌日河上肇氏を訪ねて、比叡登



りの相談などをして、ほぼ決行することになったのだが、後で河上氏が山登りは見合わせることにしたと、宿屋までわざわざ知らせに来たので、私は厄介のがれの安心をした。そして、小剣は、「家へ帰りたくなつた」と、その夜いつていたが、翌日自分の行きたい所へ行つて夜行で帰ることに極めた。それで、翌日は朝飯後宿を出て、大通りへ来ると、二人は互いに「左様なら」をいって、右と左へ別れた。私は独り旅の気安さを覚えて、三、四日京都見物をして過した。小剣も、ああはいつたもののみだ京都に留まっているのではあるまいか。何処かでバツ

タリ出会うことがないとも限らないと、私は空想をめぐらしたりした。

たまに小剣とたべ物屋へ行つて食事を共にする時には、自分の食った物は自分で払うことにしていた。秋声、秋江など三、四人で会食する時にも、大抵はオランダ勘定、京伝勘定にするのを例としていた。ちゃんと割前で支払いをするのだ。江戸ツ子気質でなかつたのだ。昔は、新聞記者仲間でも文士仲間でも、上べは、割前で飲食することは軽視した風を見せていたものだが、そのため、事が面倒になることが多かつた。泡鳴が自分で発起

人となつて或る会合を催した時、酒はめいめいに払うという規定を設けた。「何だケチ臭い」と、支払いに當つて、一杯機嫌の武林無想庵がいったが、これは後日一般の慣例となつたようだ。泡鳴は勇敢にそれだけでも実行したのであつた。封建的遺風のあつた昔は、無論そんな事はなかつたので、同じ会費で、上戸は飲みたいだけ飲んで威張りちらし、下戸は何時<sup>いつ</sup>までも飯をくわされないで小さくなつていたのである。飲まぬ我々が飲む奴の酒代を払つてやるのは不合理である、馬鹿らしいことであると、私は昔から考えていたので、泡鳴の立案には賛成

であつたのだ。しかし、こんな事も、泡鳴はじめ、我々の知人の財産が豊かでなかつたための結果で、たつぷり持っている者が仲間うちにあつたなら、些細な会食費くらい一人で負担してくれたにちがいない。紅葉なんか、親分気取りで門下生には三尺下つてお辞儀させたりしていたそうだが、会食すると、門下生にも割前を払わせていたと、秋声から聞かされたことがあつた。

人間万事金の世の中である。泡鳴の『耽溺』一篇の苦悶は、些少の金がありさえすれば、直ぐに解決されるのであつた。『放浪』『断橋』などにある女性との葛藤も、

些少の金があつたら目出たく解決されるのであつた。秋江の『別れた妻』も、秋江に些少の生活費を稼ぎ出す力があつたら、別れた妻にならないで、家庭生活がどうか続けられるはずであつた。そうすると、彼らに傑作を生ませたのは貧乏の所為であつたといつてもいい。

#### 四

秋声は多数の長篇を書いた。大抵は新聞に連載されたので、地方新聞にもよく書いたようである。これも生活

のためには止むを得ず製作したのである。彼の幾多の傑作も、生活費の必要上執筆されたといつてもいいだろう。しかし、長篇から長篇と、続けざまに書かなければ生活して行けなかったのは、歎すべき事であった。苦しい生涯であったであろうと、今から顧みて想像される。しかし、彼は晩年になるほど名声が高まり、死後はますます重んぜられるようになったのだから、多年の苦痛もむくいられた訳だ。長い間製作に苦勞しながら、苦勞し損で没落した作家が如何に多きか。

秋声は紅葉門下としても、はじめのうちは、鏡花や風

葉のように華やかでなく、陰気にくすぶっていたが、自然主義勃興につれて、その本領を發揮しだしたのであった。花袋は『蒲団』によつて一代の氣運を捲き起すとともに、文壇の重鎮として栄えたのであったが、自然主義が下火になるとともに、彼の名声もいくらか薄らぐようになつた。「落ち目に会いたくない」と、懇意な門下生にいつていたそうだ。晩年『源義朝』の出版された時に、藤村をはじめ、我々知友が、この歴史小説の出版の記念として彼を、田端の自笑軒に招いて一夕の歡をつくしたのであったが、その時花袋は、「僕がもう駄目になつた

から、諸君がこんな会を開いてくれたのだ」と、ふと感傷的な言葉を洩らした。それは私には意外であった。私などは、別段花袋の作品が衰頹しているとは思っていなかったが、今日になって回顧すると、花袋もあの頃は筆が行き詰まっていたのであろうし、青年時代から文壇の名声を気にする癖のあった彼は、人一倍自己の晩年を痛ましく感じたのであろう。口先や筆先では毀誉褒貶きよほうへんに超然としているらしく見せかけていても、文壇人は俳優や音楽家と同様、人気を気にするのが普通である。花袋は、通俗趣味を排斥し、人気に捉われぬようにとかねて心掛



けていたらしかつたが、それでも毀誉褒貶から超然とし得なかつた。

花袋全集は、生前において、死後において、二、三度出版されたようだがいつも売れ行きが悪かつたようだ。どういふ訳であろうか。分り易くて情味があつて、一般の小説読者に喜ばれそうに私は思っている。改めて世に認められる時が来るのではあるまいか。私はこの頃、彼の『東京の三十年』を読んだついでに、その小説を新たに読み直して見たいと思ひながら、二通りも三通りも持っていた彼の作品集はすべて焼失したので、まだ望みを

達しないでいる。しかし、『時は過ぎ行く』だの、『再び草の野に』だのを漠然思い出して見ると、それらの作品に対する親しみが感ぜられる。そこには花袋一流の詩があるのである。藤村花袋は並び称せられたもので、近年は彼と此これとは段ちがいのように思われているが、果してそうであろうか。

花袋の筆蹟は味いがあると、私は思っている。短冊に書かれた歌の字がうまい。泡鳴の字は私の知人中で最もまずい。粗雑で何らの妙味もない。秋声の字は枯淡である。秋江は手紙は甚だうまいが、私はあの字は好まない。

いや味を感じる。私は芥川龍之介の作品の愛読者であるが、彼の俳句は好まず筆蹟も好まない。高山樗牛の字はセンチメンタルであり、逍遙二葉亭とも、ちよつと見はうまそうで、含蓄味はない。私は花袋の字が好きだ。

花袋逝去後殆んど二十年。私も長生きをしたものだ。彼も泡鳴も、近年の日本について何の予感もなかった。そして、日本その者について、日本の文学について、お目出たい太平楽を並べていたのだ。泡鳴にしろ、花袋にしろ、善良な彼らであった。女を愛し文学を好み、奮闘して一生を過した。しかし、今回顧すると、彼らは人生

の根本義について、私に何を教えているであろうか。女を愛し女に溺れ、女に苦しめられ、文学を好み、文学によって功名心を満たさんとし、文学によって生活費や遊蕩費を獲得せんと努力した一生に、人間の人世経過の一例を見るばかりである。「人生の根本義なんかを問題にするのは馬鹿だよ。刹那刹那に生きて行けばいいのだ。それ以外に何も無いのだ。それ以外は妄想だ」と、泡鳴はいうであろう。しかし、現在に生ける我々は、刹那刹那の生の内容が稀薄で、現実尊重の念に燃え立たないものである。わが亡友たる上述の諸氏は、死に際して、「わ

れよく生きたり」という思いが、心にきらめいたであらうか。

ここまで書いて、一先ず筆を擱おこうとしたところへ、私の旧ふるい「随筆集」が見つかったので、披ひらいて見ると、そこに、泡鳴に関する追憶が書かれてあったが、そのうちに、「私は今でも彼について一つの疑問を持っているが、彼は自分が空想に描いただけのことを、実際に行つたように思い込んでいたことがあったのではあるまいか。彼は嘘を吐く男ではなかったが、彼の話に私の前に落ちないことがよくあった。女に関してはことにそうだ

った」と書いてあった。現実一点張りの泡鳴も、案外空想の虜となったことがあったのでなからうか。彼のいわゆる徹底的の「私小説」にも、案外空想分子が多いのではあるまいか。バルザックは空想で描いた作品や作中の人物を、実在と見倣すことがあったそうだが、泡鳴にもそんな事があったかも知れない。そう思って、泡鳴の作品や論文を読み直すと面白いだろう。







日本文学電子図書館

---

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
2002年6月14日 第1刷

---

日本文学電子図書館